

## A 語句の意味と読み

(1) 読み＝あかつきがた／「暁」は、夜が明けきる前の、まだ暗い時分。／★夜中→暁→曙（あけぼの）→朝ぼらけの順に明るくなる。「暁」はまだ暗い

(2) 翌朝。（事のあった、その次の朝。）ここは、門を開けさせずに兼家を追い返した、その翌朝のこと。／★「つとめて」＝①早朝 ②（何かがあった）翌朝。ここは②。現代語の「努めて」ではない

(3) （花の）色があせる。盛りが過ぎて衰える。※「（人の）心が移り変わる」の意もあり、ここではその意味も重ねられている（E群⑩参照）。／ここは色あせた菊。夫の心変わりを重ねている

(4) ためす。ためしてみる。ここは「門が開くかどうか、ためしてみよう」ということ。／漢字では「試みる」。マ行上一段活用動詞

(5) もっともだ。当然だ。道理にかなっている。／名詞「ことわり（理）」＝道理・筋道。「無理もない」と訳してもよい

(6) 何事もなかったかのようにふるまう。さりげなく取りつくろう。平然としている。／「事無し」＋「ぶ（～らしくふるまう）」。悪びれないようす

## B 文法

(7) 副詞「さ」＋断定の助動詞「なり」の連体形「なる」＋助動詞「めり」。「さなるめり」→撥音便「さなんめり」→「ん」を書かない形が「さなめり」。意味は「そうであるようだ」。※「めり」は推定とする教科書と婉曲とする教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／★「～なめり」「～ざなり」は撥音無表記の代表。もどすと隠れていた助動詞が見える

(8) 「させ」＝使役の助動詞「さす」の未然形（力行下二段動詞「開く」の未然形「開け」に付く）。「ね」＝打消の助動詞「ず」の已然形。已然形＋「ば」で順接確定条件になり、全体で「（従者に門を）開けさせないので」の意。／★「ね」を打消「ず」の已然形と見抜くのが決め手。命令形の「ね」ではない。実際に門を開けるのは召使いなので、ここの「さす」は尊敬ではなく使役

(9) 打消意志（～まい・～ないつもりだ）／終止形。「このまま何もしないではいるまい」の意。／★「じ」は主語が一人称なら打消意志、三人称なら打消推量。ここは作者自身のことなので打消意志

(10) 接続助詞。ここは動作の並行で「～しながら」（嘆きながら独り寝をする）。ただし「嘆き続けて」と反復・継続にとる教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「つつ」は連用形に付く。①並行（～しながら）②反復・継続（～しては・～し続けて）

(11) 動詞。ナ行下二段活用「寝（ぬ）」の連体形。ここは「ぬる」と読む（下の「夜」にかかる）。／★本文の「寝る」は「ぬる」と読む。活用は ぬ／ね／ぬ／ぬる／ぬれ／ねよ。完了の助

動詞「ぬ」の連体形「ぬる」と取りちがえやすいが、ここは「独り寝をする」という動詞

(12) 「明くる」＝夜が明ける／「開くる」＝（門・戸が）開く。門を開けてもらえないまま夜が明けるのを待つつらさを、一語に重ねている。※この「あくる」を掛詞と見るかどうかは説明が分かれる。この記事とセットの解説記事「嘆きつつ 現代語訳」では、掛詞は兼家の返歌「真木の戸もおそくあくる」のほうに見て、作者の歌のほうは「明くる」と漢字で表記している。お使いの教科書の説明に合わせる。／★作者が③「開けさせねば」と門を開けさせなかったことが、この一語に効いている

(13) 反語の係助詞（～だろうか、いや～ない）。結び＝「知る」（ラ行四段動詞「知る」）、活用形＝連体形。／★ふつうの疑問「～だろうか」で止めると誤り。「いや、おわかりにはなるまい」まで含めて反語

## C 主語・指す内容

(14) 明け方に門をたたいているのが、夫の兼家であるということ。／直前の「門をたたく時あり」を受けている

(15) 開けさせなかったのは作者（藤原道綱母）。門をたたいていたのは夫の藤原兼家。／「させ」が使役なので、実際に門を開ける役は召使い。それを命じる立場にるのが作者

(16) 「例の家」＝兼家がいつも通っている「町の小路の女」の家。主語＝兼家。／「例の」＝いつもの。門を開けてもらえなかった兼家が、そのまま女のもとへ行ってしまった

(17) 夫の兼家が、作者（藤原道綱母）に対して述べた言葉。返事の中で、門を開けてもらえなかったことについて、自分の非を認めるふりをしている。／「返り言」＝兼家からの返事。かぎかつこの中はすべて兼家の言葉

## D 口語訳

(18) （門をたたいているのは夫の兼家）そのようだと思うが、いやなので、（門を）開けさせないでいると（開けさせないので）。／「憂し」＝つらい・いやだ。「ねば」は已然形＋「ば」で順接確定条件。「～ないので」「～ないでいると」のどちらで訳してもよい

(19) 嘆きながら独り寝をする夜が明けるまでの間が、どれほど長いものかおわかりになりますか。いえ、おわかりにはなりませんまい。／「かは」が反語なので、最後を打ち消して結ぶ。門を開けてもらえない夫への恨みを、そのままぶつけた歌

(20) （夜が）明けるまでも（門が開くかどうか）ためしてみようとしたけれど、急ぎの召使いがやって来合わせたので（やむなく帰ったのだ）。※「なむ」のあとは言いさしになっていて、続く言葉が省かれている。／「とみなり」＝急だ。「来あふ」＝ちょうどやって来る。兼家の言い訳の部分

(21) なるほどなるほど（おっしゃるとおりです）。冬の（長い）夜ではないけれど、真木の戸も、なかなか開かないのを待つのはつらいものだなあ。／「げにやげに」＝なるほどなるほど。「真木」＝杉や檜などの立派な木。文末の「けり」は詠嘆

## E 内容・記述

(22) 門をたたいているのは夫の兼家であるようだったと思ったが、ほかの女のもとへ通う夫の仕打ちがつらく、いやでたまらなかったから。「さなめりと思ふに、憂くて」がその心情にあたる。／「憂し」の一語に、作者のつらさと不快がこめられている

(23) このまま黙ってはいるまいと思い、恨みの歌をいつもより念入りに書いて、色あせた菊にさして兼家に贈った。／「なほもあり」＝そのまま何もしていないでいる。それを「じ」で打ち消している

(24) 「うつるふ」は色があせる意で、色あせた菊に、自分から離れていく兼家の心と、衰えていく二人の仲を重ねたから。歌の言葉だけでなく、そえた菊にも恨みと嘆きをこめている。／★歌そのものより「何にさして贈ったか」が問われる。菊＝夫の心変わりの象徴

(25) 浮気を悪びれるようすもなく、何事もなかったかのように平然とふるまう態度。作者は、隠そうともしない夫の態度にあきれ、不信と不快をつのらせている。／直前の「いとあやしかりつるほどに」を受けている。ここは「あれほど不審だったのに」と逆接ぎみに補って訳す本が多いが、「ほどに」はもともと「～うちに・～ので」の意で、訳し方が分かれる難しいところ。お使いの教科書の説明に合わせる

## F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝藤原道綱母。平安時代中期に成立した、女性自身の手による最初の仮名日記とされる。夫との約二十年の結婚生活をつづった作品。／『土佐日記』は男（紀貫之）が女に仮託して書いた日記。女性自身が書いた日記としては『蜻蛉日記』が最初とされる

(27) 右大将道綱母。／息子の藤原道綱が右大将になったことによる呼び名

(28) 藤原兼家。のちに摂政・関白となった有力貴族で、藤原道長の父にあたる。作者は兼家の妻の一人であった。／当時は一夫多妻。兼家には正妻の時姫をはじめ複数の妻がいた

## 【現代語訳（全文）】

二、三日ほどして、明け方に、門をたたくときがあった。（夫の兼家が来た）そのようだと思うが、いやなので、（門を）開けさせないでいると、（兼家は）例の家（＝町の小路の女の家）と思われる所へ行ってしまった。

翌朝、このまま黙ってはいるまいと思って、

嘆きながら独り寝をする夜が明けるまでの間が、どれほど長いものかおわかりになりますか。いえ、おわかりにはなりません。

と、いつもよりは念入りに書いて、色あせた菊にさして（贈つ）た。

返事は、「（夜が）明けるまでも（門が開くかどうか）ためしてみようとしたけれど、急ぎの召使いがやって来合せたので（やむなく帰ったのだ）。（あなたが怒るのは）まことにもっともなことでしたよ。

なるほどなるほど（おっしゃるとおりです）。冬の（長い）夜ではないけれど、真木の戸も、なかなか開かないのを待つのはつらいものだなあ。」

とある。それにしても、（私が）たいそう不審に思っていたのに、（兼家は）何事もなかったかのようにふるまっている。

※「いとあやしかりつるほどに」は「～のに」と逆接ぎみに補って訳す本が多いが、「ほどに」はもともと「～うちに・～ので」の意なので、訳し方は教科書によって分かれる。お使いの教科書の説明に合わせる。